

『複製日本古典文学館』 釈文

中山家本
源氏物語

日本古典文学会編

『複製日本古典文学館』釈文
中山家本 源氏物語

昭和四十七年九月一日印刷
昭和四十七年一〇月一日発行
定価 五〇〇円

〈検印省略〉

編集 日本古典文学会

東京都千代田区六番町四山菱ビル
代表者 久松潜一

刊行 日本古典文学刊行会

東京都千代田区六番町四山菱ビル
代表者 山岸徳平

印刷 株式会社 精興社

東京都青梅市根ヶ布一三三八五

製作 東京連合印刷株式会社
東京都千代田区麴町三十二
相五第

落丁本・乱丁本はお取替いたします

『複製日本古典文学館』 釈文

中山家本

源氏物語

若紫・末摘花・繪合
行幸・柏木・鈴蟲・幻

日本古典文学会編

目次

幻	鈴蟲	柏木	行幸	繪合	末摘花	若紫
.....						
一五	一三	一五	九	七	望	五

凡 例

一、中山輔親氏藏源氏物語写本七帖（若紫・末摘花・絵合・行幸・柏木・鈴虫・幻）を可能な限り原本に忠実に翻刻するに当たって、次の方法に従った。

一、冒頭に各帖の表紙の形式を野の匡郭により示した。

一、原本通りの字詰に従って改行し、傍書もそれに準じた。

一、漢字と仮名の差や、仮名づかいは原本のままとしたが、漢字は正体に、変体平仮名は通行字体に統一した。また、「も」をあらわす「ん」は、すべて「も」として示した。

一、句読点、合点、声点はすべて原本通りとした。朱墨の区別はしなかったが、それらはすべて朱で施されている。

一、補入記号「。」や、見せけちの「ゝ」は原本通りに示したが、文字の上から線などで抹消した場合は左に傍線を引くことによって示した。なお、幻の巻では校異箇所を示すのに見せけち記号を用いている。

一、破損などにより文字が欠けて読めない場合は、その字数に應じて、□または□によって示した。

一、歌は原本では一、二字下げて書き出しているが、すべて二字下げに統一した。若紫の巻で、原本が誤って歌の二行目を字下げしているのもそのままに示した。

一、屏紙の文字は（屏書）とし、丁数は本文の開始する丁を第一丁として、表裏の別を（1オ）（2ウ）の形式で、それぞれの文の終わる下に示した。但し、前後に白紙のある場合にはその丁数を示さなかった。

一、意味の通じがたいと思われる箇所は、右傍に（ママ）と注記した。

一、若紫の巻に欠丁があり、行幸と鈴虫の巻に写落しがあるので、その箇所の下にそれぞれ注記した。

一、欠丁や写落しの箇所は、特に別本に同系の伝本を見ないので、参考までに、すべて源氏物語大成の底本（大島本・青表紙本系統）に依り、巻末に一括して示した。

一、本巻は、池田利夫（鶴見女子大学助教授）が担当した。

〔若 紫〕

わかむらさき

〔扉書〕

わかむらさき

〔表紙〕

わらはやみにわつらひ給てさま／＼に
ましなひかちなとまいらせ給へと
しるしなうてあまたゝひおこり給
へはある人きた山に何かし寺らと
いふ所にはへるかしこきおこなひ
ひとこそ年ころかゝる心ちにて
まちなひわつらふ人／＼はへし^{へッ}を
やかてとゝむるたくひおほく侍へり
けれかうのみおはしましてひさしう
ならせ給はゝいとなんひんにさふらはん
とくこそこゝろみさせ給はめなとき
こゆれはめしにつかはしたるにをい
かゝまりてむろのともえいて
はへらぬよし申させたれはいかゝはせん

（1オ）

いとしのひてものせんとのたまひて

御ともにむつまじき人四五人はかり

してまたあか月にをはしますやゝ

ふかく入ところなりけりやよひの

つこもりなりければ京のはなみな

ちりたるを山櫻はまたさかりにて

(1ウ)

〔頭書〕フルサトノ花ハチリツ、ミヨシノ、山ノサクラ

ハマタサカリ也

サトハミナチリハデテシラアシヒキノ山ノサク

ラハマタサカリナリ

入給にかすみのたゝすまひも

をかしうみゆれはかゝる御あり

きもところせき御身にてめつら

しうおほされけり寺らのさまい

とあはれなりみねたかうこふかき

所にそひしりはるたりけるのほ

り給てたれともいはせすいたうやつれ

(2オ)

たまへれとしるき御さまを

みたてまつりてあなかしこ一日め

しさふらひしにやははします

覽いまは此世事思ひたまへねは

けむかたのをこなひはみなわすら

れて侍るをいかてかをはしまし

つらんおとろきさはきてうちゑ

みてみたてまつるいとたうとき大

とくのさま也さるへきふんつくりて

すかせたてまつりかちなとまいりて

すこしひたかうなるほとにたち

いてゝ見わたし給へはたかき所に

てこゝかしこの僧房なとあらはに

みゆたゝこのつゝらをりのし

もにをなしこしはかきなれと

うるはしうきよけなる房とも

らうなとつゝけてこたちいとよ

しあるさましるきをたかすん

(3オ)

(2ウ)

ところならむととひ給へはかれな
む何かしのそうつの此ふたとせ
こもりて侍るところなくるとき
こゆ心はつかしき人のすむところ
にこそありけれあやしうもあ
まりやつしける哉きゝつけも
こそすれとの給きよけなるあま
わらはへなといてきてあかたてま
つり花ともおるもあらはにみゆ
かしこには女こそありけれ
そうつはよもすゑ給はしいかなる
にかあ覽なとくち／＼いふをりて
みてをかしけなるわかき人／＼も
ありなといふ君はをこなひし給
つゝ日たかくなるまゝにいかならん
とおほしたりとかくまきはさせ

〔頭書〕ヲコリハマキラハシテスキヌレハヲツル物也

(3ウ)

給ておほしいれぬなんよう侍
ときこゆれはうしろのやまにたち
いてゝ京のかたをみやり給はるかに
かすみわたりてよもの木すゑ
そこはかとなうけふりわたる程
ゑにいとようもにたる哉かゝる
所にすむ人のこゝろに思ひのこす
事はしもあらしとのたまへは
これはいとあさく侍り人のくに侍
海山などを御らんしたらいかに
まして御ゑまさらせ給はんわし
の山なにかしのたけなとかたりき
こえさする人あり又にし國のを
もしろきうら／＼いそ／＼のうゑいひ
つゝくるもありてまきはしき
こゆらかき所ははりまのあかしの
うらこそなをことにはへれ何の

(4オ)

(4ウ)

いたはりふかきくまはなけれどたゝ
うみのおもてをみわたして侍るに
事所にはにすゆほひかなるところに
侍るかの國のさきのかみしほちの
むすめかしつきすゑたるさま

(5オ)

いたしかし大臣しんの御のちにてい
たちもすへかりけるを世のひか
物ものにてましらひもせず左近

中將をすてゝ申給へりけるつかさ
なれとかのくにの人にもすこし
あなつられたりけるにや何のめい
ほくにか宮こにもかへらんとてか
しらをろしてはへりけるを

(5ウ)

すこしおくまれる山すみもせて
いてゐたるひか／＼しきやうなれと
けにかの國のうちにさもこもり
ゐたりぬへき所はおほかれとあまり

ふかきは人はなれこゝろすこくわか
きさいしの思ひわひぬへきにより
かつは心をやれるすまひになん
侍るさいつころあからさまにまかりくたりて
はへしにありさまも見たま

(6オ)

えむとてまかりよりて侍りき
京にて思にこそこゝろえぬやうには
はへりけれさはかりはかりなるはま
をこめてつくりたるさまいとめつら
しうさはいへと國のつかさにてし
おきたりける事ともいとおほかり
けれはのこりのよはひゆたかに
ふへき心かまへもになく後のよの
つとめまたいとううして中／＼いとうく
ほうしまさりしたる人になん
侍りけると申せはさてかのむ
すめはとゝはせ給こまかにしり給へ

(6ウ)

すかたちこゝろはせなとはけしうは
侍らさるへしたいくくのにかみさ
るこゝろはえみせてよういしなと

すなれとさらにうけひかす我身
をいたつらにしなしつるたにあり

此人ひとりは思こゝろありもし我に
おくれてそのこゝろさしと

けす思ひをきつるすくせたかはゝ
海に入ねとなんあけれ申なると

申せは君をかしき事哉ときゝ

をはす人くかいりうわうのきさきに
なるへきむすめなりこゝろたかさ

くるしやなとわらふかくいふははり
まのかみのこの藏人にてことし

かうふりえつるなりけりいとすき
たる物にてろなうかの入道のゆ

いこんやふらんのこゝろあらんかし

(7オ)

さてたゝすみよるならむなといへは
いて何かはさはいふともの中ひに
たらむをさなうよりさる所に

おひいてゝふるめきたるをやとも
をかしきものにしたかひな

らひたれははゝこそゆへあるへけれ
よきわかひとわらはへなとるいにふ

れつゝたつねとりて宮このやん
事なき所くををとらすまはゆき

までこそかしつくなれなさけ

なきひとゝなりていかはさのみ心に
まかせてあらせしかしなといふ

人もあり君はなにこゝろをゝもり
てうみのそこまでふかくおもひい

るらんそこのみるめも物むつかしうとて
たゝならすおほしたりかうやうにて

もなへてならすひかみたる事

(8オ)

(8ウ)

(7ウ)

このむ御こゝろなれはみゝとまり給

覽をやとみたてまつるかゝる程に

暮かゝりぬをこらせ給はすなり

ぬるにこそ侍るめれいまははやう

かへらせ給なるときこゆひしり

御ものゝけなとくはゝりてみさせ

給をこよひはかりしつかにかちなとも

せさせ給ていてさせ給へと申せは

さもある事ゝ人ゝもきこゆれは

さらはあか月にととゝまらせ給ぬ

かゝるたひねもならはぬ御こゝちに

おかしうおほされぬへかりけり

日もいとなかうつれゝなれはゆ

ふくれのいたうかすみたるまき

れにこのこしはかきのもとにた

ちいて給人ゝはみなかへし給て

これみつばかりしてのそき給へは

(9オ)

たゝ此にしおもてにち佛たうす

ゑたてまつりてをこなふあま

君なりけりすたれすこしまき

あけてはなたてまつるめり

中のはしらによりゐてけうそくに

經うちおきてよみるたるさまたゝ

ひとゝはみえす四十よはかりにやとみ

えてすこしやせたれとしろうあてに

てつらつきふくらかにてまみのほと

かみのをかしけにそかれたる程

なかゝなかきよりはさまかはりて

あはれとみたまふきよけなる

おとなふたりはかりゐたりきては

わらはへそおほきなるちひさきと

いて入あそふ其中に十はかりやあら

むとみえてしろき山ふきなど

きてはしりいてたるさまあまた

(10オ)

(9ウ)

(10ウ)

みえつることもにゝるへうもあらず
いみしうつくしけにてゆくさ
きおもひやらるゝさま也かみはあふ
きなとをひろけたるやうにて
ゆら／＼とたふめきかゝりてかほを
いとあかうなしてたてり何事そや
わらはへとはらち給へるかとて
あま君のうちみあけ給へるま

みのすこしおほえ給へれば

こなめりとみ給すゝめのこそ

いぬきかにかしつるふせこのう

ちにこめたりつるものをとて

いとくちをしとおもへりこのゐ

たるをとなれいのこゝろなしの

つねにかゝるわさしてさいなま

るゝこそ心うけれいつかたへまかり

ぬらんとをかしうやう／＼なりつる

(11オ)

ものをからすなともこそみつ
くれとてたちていくうしろて
もかみなといとなかくめやすし少納言
のうしろみなるへしあま君い
てあなをさなやいふかゝるなくもゝ
のし給哉をのかゝくけふあすとを
ほゆるをは何ともおほしたらて
すゝめのこをしたひ給ほとよ

つみうる事ゝつねにきこゆるも

のを心うやとてこちやとのたまへは

つゐる給つらつきおもやういとらう

たけにてまゆのわたりうちけ

ふりいわけなうかきやりたる

かむさしひたひいみしうを

かしけにてねひゆかんあり

さまゆかしき人哉とめのみとま

り給はまつ我かきりなう心さし

(11ウ)

(12オ)

をつくしたてまつる人にゝたる
なりけりとまもられ給にもなみた

(12ウ)

たるかみつや／＼とめてたう
みゆ

そこほれぬるかみをかきなて

をひたゝんありかもしらぬわか

(13ウ)

つゝあま君けつる事もうる

ねくさをゝくらす露そきえんそらなき

さけにし給にうつくしの御く

またゐたるおとなもけにとうち

しやいとはかなうものし給こそ

なて

あはれにうしろめたけれか

はつ草のをひゆくすゑもしらぬ

はかりになりぬれはかゝらぬ人も

まにいかてか露のきえんとすらん

あるものをこひめ君も十にて

なといふほとに僧都あなたより

そ殿にはをくれたてまつりし

いましてこなたはあらはに侍らん

かといみしう物はおもひしり給へり

(13オ)

今日しもはしにをはしまし

きたゝいまをのれすてたてまつり

けるよかのかみのひしりの房に

てはいかにし給はんすらむとていみ

源氏の中將わらはやまましなひ

しうなくをみ給もすゝろにかな

にものし給けるをたゝいま

しをさなこゝちにもさすかにう

なむきゝ侍りつるいたうしのひ

ちまもりてふしめになりて

給ければえしり侍らてこゝに侍り

うつふしたるにこほれかゝり

なから御とふらひにもまいらさり

(14オ)

けるとのたまへはあないみしや

あやしけなるさまを人やみ

つらんとてすたれをろしつ

此よにのゝしるひかる源氏みたて

まつり給はゝやよをすてたるほ

うしなとたにみたてまつるに

世のうれへわすられよはひのふる

心地する人の御さまなりといふなり

いて御せうそく申させんとてた

つをとすればやをらかへり給

ひぬあはれなる事とゝもおも見

つるかなかゝれは此すきものともは

かゝるありきおのみしてよくさる

ましき人をもみつくるなり

けりたまさかにたちいてた

るにたにかくおもはすなる事

をみるよとをかしうおほさるさ

(14ウ)

てもうつくしかりつるちこの

ありさまかなかれをえてかの

人の御かはりにあけくれみはや

とおもふ心つきぬうちふし給へる

ほとにそゝうつの御てしこれみつ

をよひいたさせて御せうそく

きこゆるほとなき所なれは君もや

かてきゝ給ちかきほとによきり

をはしましたるよしたゝいま

なむうけ給はりさふらひつる

おとろきなからさふらふへきを

何かし此寺にこもり候よし

しろしめしなからしのひさせ

給けるをうれはしう思給てなん

草の御むしろも此房にそま

うけさふらはすへけれいとほいなき

事ゝ申給へりいぬる十日より

(15ウ)

(16オ)

わらはやみにわつらひ侍りつるたひ
かさなりてたえかたう侍るかゝる

所をたつねいてゝもかやうの人のし
るしあらはさゝ覽はたゝならん

よりはいとをしう思ひたまへて

なむいたうしのひ侍りつるいまそ

なたにもとのたまへりすなはちそ

うつまいり給へりほうしなれと人

からいとやむことなく心はつかしき

物によにをもはれ給へる人なれは

かくかろくしき御ありさまをいと

ほしうおほすかくゝもるほと御も

のかたりきこえ給てをなしゝはの

いほりなれとすこしをかしき水

のなかれも御らんせよとせめてきこゑ給へは

またみぬ人にことくしういひきかす

なりつるもつゝましうおほさるれと

(16ウ)

あはれなりつるありさまもよく
みまほしうおほされてをはし

ますけにいとこゝろありてをなしき

草のたゝすまひなれとうゑなし

給へり月なともなきころなれは

やり水にかゝり火ともしてとうろ

にもあまたかけわたしてみなみ

をもていとときよけにしつらひ給へ

りそらたきものこゝろにくき程に

名香などのなつかしうかほりあひ

たるに君の御をひかせのこゝろ

事なるをうちの人もこゝろつかひ

すへかめりそうつ世中の御ものかた

りきこえのちのよの事のふかき

なときこえしらせ給へり我御つ

みのほとをそろしうあちきなき

事におほしめしていけらんかきり

(17オ)

(17ウ)

(18オ)

これをゝもひやむへきにもあらさ

めりましてのちのよはいみし

かりぬへき事ゝおほしつゝけて

かやうならんすまゐもいとせまほしう

おほさるゝ物からひるのをもかけは

心にかゝりていみしうこひしう

おほえ給こゝにをはするはたれにか

たつねきこえまほしきゆめをみ

侍りし哉今日なんおもひあはせ

はへるへきときこえ給うちわらひ給て

うちつけなる御夢かたりにそ侍

なるきこしめしても御こゝろをと

りせさせ給ぬへしやことう大納言は

よになうなりてひさしうなり侍

りぬれはしらせ給はしかし其

きたの方にはへしなんなにかしか

いもうとに侍るかあせちかくれられて

(19オ)

のちよをそむきて侍か月ころわつら

ふ事侍るにかく京にまかてはへら

ぬころなれはたのもし所に思給て

ものし侍るなりときこえ給かの

大納言はむすめものし給ときゝしは

すきゝしき方にはあらすまめやかに

きこえ侍るそとをしあてに

のたまへはさる人たゝ一人侍りしかと

うせて此十年にやなり侍りぬ

らんこ大納言うちにたてまつらん

とかしこくかしつきはへし程に

其ほいもえとけてかくれ給にしかは

たゝ此あまに身ひとりもてあつ

かひ給しほとにいかなる人のしわざ

にか兵部卿の宮しのひてかよひ

つき給えりければもとのきたの方

やむことなくなとしてやすからぬ

(19ウ)